

あの涙があったから、 いまの幸せがある。

筑豊教会 金子祐子さん

金子祐さんは、小学生の時に両親が離婚したせいで、幼い肩にのしかかった家事のつらさや寂しさから夜毎泣いていた。しかし、高校生の頃、現在の夫と夫の両親に出会い、「家族愛」に恵まれる。ところが、家事、仕事と信仰のお役にと多忙を極めていた平成26年、小学5年生の長女が友だちを傷つけることを言って仲間はずれにされ不登校になってしまう。金子さんは、「私がかんばらなきゃいけない。だけど…」逃げ出したくなかったが、「娘も同じつらさを抱えている。なすべきことから逃げずに向き合う姿を示そう」と、夫とともに学校を訪れた。クラスの友だちに「登校できるようになったら、よろしくお願いします」とお詫びと家まで誘いに来てくれたお礼を伝えた。こうした変化に何かを感じた娘は登校し始め、無事に小学校を卒業。娘の卒業アルバムを手にした金子さんの目にはうれし涙が流れ、過去のつらかった日々を乗り越えたからこそその、いまの幸せを噛み締めた。



原点に帰ろう

何ごとも原点に帰って学びを深めていくことの大切さは理解できても、実際には、毎日のご供養さえ初心のころのような気持ちでつづけられないという人もいます。

「恋法」という言葉があります。ただひとすじに、純真に法を求めるといふ意味で、法華経「勧発品」の「勧発」のことを天台大師がこのように解釈して記された言葉のようです。

たしかに、仏の教えを聞かせていただきたくないと一心に願うのは、あたかも人を恋慕うときのように、相手(法)のことをもつと知りたいと思ひ、相手とともに歩みたいと願って、それを純粹に求める気持ちに似ています。いつでも信仰の原点に帰って精進するには、人を恋するように道を求める気持ちが必要になるということでしょう。

ただ、そうはいっても一般社会にあつて日々の生活を大切にしながらとなると、信仰一途には行けないこともあります。生きるためには利害や打算も無視できなくて、そのために精進がおろそかになるのもやむを得ないかもしれません。それでも、みんなと一緒にいい社会をつくり、ともに幸せになりたいという、幼い子どもがもつような純粋な願いを忘れなければ、いつでも発心したころの気持ちに帰ることが出来ます。つまり、「道心」とともに「童心」を失わないうことが大切だということです。

立正佼成会